

究の中心であるアメリカ。短期ではあるがガッツリ得るモノは得てきたいと思う。

最後にメキシコの食事をレポートしたい。メキシコと言えば、サルサ、タコス、テキーラと言う方が多いのではないのでしょうか。確かにカフェやレストランにはたいい大きな肉がグルグル回っていて、その肉を切り落としてパンやタコスに挟んで出てくる店ばかりだった。というかほとんどがそういうお店で、メキシコ人は毎日これを食べているのかとも思った。しかし地球の歩き方に載っているようなおしゃれなレストランでは写真（右下）のような料

理もあった。これは黒いソースがたっぷりかかったモーレと呼ばれる有名料理で、甘いよく分からない味で私は正直無理だった。だが写真（右）のメキシコ人風の石田先生は美味しく召し上がっておられた。インド人にもメキシコ人にも間違えられるという石田先生、そして平尾さん、写真の掲載を快く許可していただいていたありがとうございました。

そして最後に、国際学会への参加、口頭発表の機会を与えて下さった柴田先生に改めて感謝を申し上げます。ありがとうございました。

第12回ヨーロッパ生物リズム学会学術大会 (XII Congress of the European Biological Rhythms Society, Oxford UK, 20-26 August 2011) に参加して

和田 快

高知大学総合人間自然科学研究科黒潮圏総合科学専攻博士課程1年
高知大学環境生理学研究室所属

イギリスはオックスフォード大学で開催された、第12回ヨーロッパ生物リズム学会に参加した。会期は2011年8月20日から26日までの7日間で、日本時間生物学会とのジョイント開催であった。参加者の多くは欧米からであったが、南米や日本からの大学院生を含む研究者も参加していた。参加人数は250-300人であった。

初日やBANQUETのある日など一部を除いて、基本的な日程は、朝一番のPLENARY LECTURE (60分)、3人の招待講演者と3人のショートコミュニケーションスピーカーによる135分のシンポジウム、ランチを挟んで、同様のシンポジウムを午後にも行い、PLENARY LECTURE (60分)、ポスターセッション (60分) と続いた。7日間で7つのPLENARY LECTURE、19のシンポジウム、246のポスター発表があった。

主に質問紙を使った疫学的研究を進める1大学院生である私なので、このような場で学会印象記なるものを書く機会を得ていることに大変恐縮しているが、学会で感じたことや得られたものを中心に振り返ってみたい。

私ごとであるが、“国際学会”にはこれまで学部3回生のときにチェコ共和国で1回、修士課程のときに大阪で1回参加した経験がある。しかしチェコの

方は地方大学がその地域・近隣諸国（主に旧東欧圏）を対象に開いた小規模なもので、言語はチェコ語と英語が6対4から7対3というものであった。一方、大阪の方は日本開催なので、当然あちらこちらに日本語が溢れているという状況であった。つまり周り中英語だらけという国際学会は今回が初めてだったのである。

21日から参加したのであるが、最初のPLENARY LECTURE、シンポジウムは、ほとんど断片的にしか内容を理解するにいたらず、ここまで聞こえないものかとショックを受けた。私のポスター発表がこの21日であったので、このような状態できちんと発表できるのだろうかと不安になったが、いざポスター会場に行ってみると、存外相手とコミュニケーションがとれ、拙いながらも説明ができた。また、想像していた以上に熱心に質問やアドバイスを投げかけてくださる方が多く、議論にすっかり熱中してしまった。実験デザインや比較対象など、すぐに活かすことのできるご意見は本当にありがたかった。

この経験から、自分の知っている単語の多い講演や、マイク越しでなく直の声ならば理解できる幅が広がるのがわかり、次の日からアブストラクトを一読してから臨むようにした。そうすると少しばかりわかるようになり、例えば、哺乳動物の視交叉上

核の体内時計に比較して、肺にある抹消時計の方がより広い周期範囲で同調因子による同調が可能であり、ある種末梢時計の方が柔軟性が高いこと、ヒトに於いて朝の太陽光曝露の影響が、前夜の白熱灯色光使用によって増幅される可能性があること、ラットなどでは、視交叉上核の個々の細胞レベル、視交叉上核のスライス組織レベル、個体の行動レベルと高次になるほど、ホルモンリズムや行動リズムの周期のばらつきが見事に小さくなり、時計周期の一本化が生理学的に行われていることなど、多くの貴重な情報を得ることができた。

ポスターセッションはよりじっくりと中身を知ることができる機会であったので、大変勉強になった。最も印象に残っているものはEva Winnebeck氏による麻酔を与える時間によってセイヨウミツバチの行動リズム、及び時計遺伝子表現リズム位相が変化するという発表で、彼女は結果的にショートコミュニケーション賞を獲得したのであるが、応用される幅の広い興味深い研究だと思った。彼女を初め、ショートコミュニケーションやポスターセッションには若手研究者・学生も数多くおり、年齢が近いことただそれだけで刺激になるものだなと感じた。

学会場を出てオックスフォードの街を散策する時間も設けられていたのでそのことを少し書く。まず受けたのは品のある街、という印象だった。夜にバカ騒ぎが起きることもなく、繁華街も度を越すことなく落ち着いて賑わっている、という感じである。さすがは大学の街ということで、街の至る所に大学関係の建物があり、その一つ一つに広々とした空間が与えられており、しっかり投資されているなという印象を受けた。オックスフォード大学のクライストチャーチカレッジには、『不思議の国のアリス』で知られるルイス・キャロルが在籍していたり、その食堂はハリー・ポッターの映画撮影にも使われて

いたりするなど、楽しむ要素も多かったことを付記しておきたい。

終わりに今後に向けての課題などを記しておく。課題と聞いてすぐに出てくるのはやはり言葉の問題である。単純に聞く・話すという能力もそうであるが、自分の研究分野の周辺領域ではある程度聞き取れ話せたことを考えると、専門的語彙がないことが最も大きな課題だと思った。また、日本語でも理解できていない、知らないことは当然英語でわかるはずもなく、ベースとなる知識量が完全に不足しているということも挙げられる。この2点のレベルを上げることができたら、吸収力も上がり、より学会が楽しめるようになるのだろうと思った。今回、このことを自分のこととしてしっかり認識できたことが何よりの収穫かもしれない。これを出発点として、日々精進していこうと思う。

最後になりましたが、今学会ではたくさんの方の日本の研究者の皆様にお世話になりました。特に東北大学の太田英伸先生ご夫妻、福岡女子大学の森田健先生、福田裕美先生、産業医科大学の久保達彦先生、北海道大学の本間研一先生、そして指導教員の原田哲夫先生には大変感謝しております。この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。



XII. Congress of the European Biological Rhythms Society参加記

中根右介

名古屋大学 生命農学研究科 博士課程後期2年

私は8月20日から26日にかけてイギリスのオックスフォード大学で開催された、「XII. Congress of